

しらはえのつき

2016
夏

夏の



奈良高専
現代視覚文化研究会

目次

小説

- ある日、森の中で ————— 03
若葉
- 夏の思い出 ————— 09
如月 吟
- 晴天の独り星 ————— 13
みのすけ
- 缶蹴り ————— 19
ツリウム
- 或るサトリ警官の一日 ————— 22
小刀

イラスト

- シスター ————— 35
- クロード ————— 36
- 猫にゃん ————— 37
- ぶっちー ————— 38

コラム

- anon_deliverzゲーム作成コラム
フランカー ————— 39

ある日、森の中で

若葉

僕の学校の敷地内には森がある。森と言ってもそこまで大きくはない。精々平均的な高校の校舎と同じくらいの面積を持つ程度だ。

だが、道が全く整備されておらず、危ないからという理由で生徒の立ち入りが禁止されている。しかし、生徒たちの間ではこんな噂が流れていた。

「あの森の中に何かすごいものがある」

その何かというのはよくわかっていないが、この噂が流れたのはかなり前で、未だに正体がわかっていない。この前森に忍び込んだ先輩は、入る直前に先生に見つかってしまい謹慎処分を受けた。

このようなことがあつたせい、

「確かに立ち入り禁止の場所に入ろうとするのはいけないことだが、だからといって謹慎処分にするだろうか？」

「あの噂は本当で、先生たちは何かがあるのか知っているのでは？」
といった感じで、噂がさらに誇張して広まっていったのだ。

夏休み。僕と友人の三人は、こつそりと森へ入るために準備をしていた。飲み物にコンパス、地図、懐中電灯などの準備をし、先生の見回りの法則性を見つけ、侵入時のアリバイを工作するなど若干やりすぎではないかというほどまでやった。

そして決行日。僕たち三人は事前の打ち合わせ通りの時間集まり、学校へと侵入した。事前の調査によると、見回りの先生はこの時間、別館の方に行っているので見つかる心配はなかった。なので、僕たちは先生に見つかることなく森の前までやってきた。

「準備はいいか？」

「うん」

「もちろん」

僕たちは頷き合った。

「よし、行くぞ」

そして僕たちは立入禁止のテープを越え、森の中へ入った。

中は真つ暗で何も見えなかった。懐中電灯で前を照らしても付近が明るくなるだけで、少しだけ森が恐ろしく思えた。同然道は整備されておらず、木の根や岩のせいでもかなり歩きにくかったが、それでもずんずんと奥へ進んでいった。

「ねえ、おかしくない？」

「何が？」

「えっと、何も聞こえないのはおかしくなかって思ってる」

夜とはいえ森なのだ。鳥や虫の声が聞こえてもおかしくないはずなのに、聞こえるのは僕たちの足音だけだ。試しに止まってみると本当に何も聞こえなくなつた。心なしか月の光も弱くなつた気がした。

「気味悪いこと言うなよ」

そう言う二人は再度歩き出した。置いていかれるのは嫌だったので、僕も急いで後を追った。

どれだけ歩いただろうか。いくら歩いても周りの景色は木ばかりだった。如何に森といえども所詮は学校の敷地内。そんなに広くなはずなのだが、一向に森を抜ける気配がしない。次第に僕たちは疲れていき、とうとう僕は音を上げた。

「ねえ、そろそろ帰ろうよ……」

元からあまり体力のない僕は今回の件に関してもあまり乗り気ではなかった。もちろん気になるのも確かだし、だからこそ今回の件にも参加したわけではあるが、拭いようのない不安が僕を襲っていたのだ。

「バカ言うなよ。折角ここまで来たんだぞ？」

「でも、これ以上進むのは危険だよ」

「なら一人で帰ればいいじゃねえか」

彼はそう言う歩みを強くした。もう一人もそれについていく。

僕も、置いていかれまいと小走りで追いかけた。

一体何時間歩いたのだろうか。水も半分をきつたというのに進んだ気が全くしない。これには流石の彼らもおかしいと感じ始めたらしく、歩く速さが徐々に落ちていく。それでも不安を口にしないのはブライドが許さないのだろう。彼らは何も言わずに進んでいく。僕はというと、徐々に彼らとの距離が離れていた。もう足が悲鳴をあげているのだ。

そして、とうとう僕はその場に座り込んでしまった。それに気付いた二人もこちらを振り向き、そして彼らもその場に座り込んだ。辺りが静寂に包まれた。僕らの足音が止んだ森は風や木々の揺れ動く音すらも響かず、三人の呼吸音だけが微かに響いていた。

彼らはリュックからお菓子を取り出すとそれを一つだけ食べた。それを見て僕も一つだけ食べた。こんなときでも、お菓子を食べると少し落ち着いていた気がした。もう一つだけ、と手を伸ばそうとしたそのとき、突然少女の声が響いた。

「何してるの？」

僕は驚いて辺りを見回した。当然少女なんていない。キョロキョロとした僕に彼らは「どうした？」と聞いてきたので、「さっき声が聞こえたんだけど……」と答えると、二人は首をかしげた。気のせいなのか？　と思つたとき、また少女の声が聞こえた。

「もしかして、私の声が聞こえるの？」

気のせいではなかった。二人は気付かなかつたらしく、何かを考えるように俯いていた。とうとう幻聴まで聞こえはじめたか、と思つたとき、少女の声はそれを否定した。

「幻聴じゃないよ」

今度も、はつきりと聞こえた。

「あなたは誰？」

そう聞いてみると二人が目を見開いてこちらを見たが、僕は気にせず声待った。すると、少女の声はすぐに答えた。

「誰かな？　忘れちゃった」

「忘れた？」

「自分の名前も、いつからここにいるのかもわからないの」

声はそう言う肩をすくめた気がした。ふと、僕は二人がこちらを心配するような目で見ていくことに気付いた。僕は、「何でもないよ。もう大丈夫だから、先に進もう」と言つて立ち上がった。二人は何かを言いたそうにしていたが、何も言わずに立ち上がり、歩き出した。僕もそれについて行つた。

「どこに行くの？」

少女の声が聞いてきたので、僕は無言で首を横に振つた。わからない、と伝えたつもりだが、どうやらすっかり伝わつたらしい。

「それなら、私の家に来なよ」

少女の声がそう言うと、左斜め方向に光が見えた。とつぜんのことに驚いてしまい、「ひっ」と声が出た。それに驚いたが二人がこちらを振り向き、僕の視線を追うように光の方へと目を向けた。光はどうやら二人にも見えているらしく、息を飲む音が聞こえた。

「ど、どうする？」

僕はおそろおそろ聞いてみた。

「行って、みるか」

そう言つて僕たちは光の方へ歩き出した。近づくにつれて光は徐々に強さを増していった。そして、僕たちは拓けた場所に着いた。木に囲まれた平原にポツンと小屋が建っている。どうやら光はそこから漏れていたようだ。

「こんなところに、小屋？」

「一体誰が住んでるんだ？」

僕たちはおそろおそろ小屋に近づいて行つた。木でできたその小屋は以外と大きく、周りには花が植えられていた。小さめだが柵に囲まれた畑もある。煙突から上がる煙が、誰かが住んでいることを表していた。

しばらく様子を窺っていると、突然ドアがギィ、と音をたて開いた。そして中から一人の少女が現れた。

「ようこそ。ほら、そんなところにいないで、中に入ったら？」

その声は僕が聞いたものと全く同じだった。そして、少女の正体がわからず恐怖を感じた。僕たちは顔を見合わせた後、「お邪魔します」と言って中へ入っていった。

中に入り、少女に勧められるがまま椅子に座った僕たちの前に、少女は三人分の紅茶を持ってきた。

「紅茶だよ。コーヒーの方がよかったならそつちを用意するから言てね」

僕たちはしばらく紅茶を見つめた後、おそろおそろの口にした。そして、紅茶を飲みながら、クツキーを持って来た少女を見た。

「さて。三人はどうしてあそこにいたの？ この森は立ち入り禁止のはずだよ？」

少女は僕たちを咎めるような視線で言った。しかしそれは一瞬のこと、少女は楽しそうに笑いながら言った。

「まあ、禁止って言われたら破ってみたくなっちゃうよね」

そう言っただけ少女はテーブルの上に置かれたクツキーを一つ食べた。そしてこう続けた。

「そもそも私は、できるだけ一人で居たいって言っただけで、誰もこの森に入れるなどは言っていないしね。ここだって、別に私の私有地というわけじゃない。ただ、この家は私が見つけたから住み着いてるだけで、誰が入ろうとそれを咎める権利は私にない」

なにか質問はある？ と続けた後、少女は紅茶を一口飲んだ。僕は、ここに着いたときから不思議に思っていたことを聞いてみることにした。

「あなたは何者なんですか？」

そもそも、僕たちがここへたどり着いたのは少女の声が僕にだけ聞こえたからだ。そんなことは、少女が人間であるならばあり得ない。

「あなたには、私が何者に見える？」

しかし、帰ってきたのは返答ではなく問いかけだった。

「人間に見えます」

少女は間違いなく人間の姿をしている。だけど、森のなかでは少女の声は僕にしか聞こえなかった。そもそも、ここから僕のいた場所まで声を届けるといふ所業も、人間では不可能だ。

「うん、私は人間だった。それも、つい最近までは、ね」

そう言っただけ紅茶を一口飲み、続けた。

「連続誘拐事件、知ってる？」

「え？ はい、知ってますけど……」

確か、今より数カ月前に起きた事件だ。この学校の生徒数人がある日突然行方不明になったという事件。この事件は学校側がスキャンダルを恐れた結果、テレビや新聞には載ることがなかったが、警察の必死の捜索でも大した手掛かりが見つからず、未だに誰ひとり見つかっていないという、この生徒なら全員が知っている事件だ。

「私は幽霊。その事件で何者かに殺された生徒の一人よ」

「……」

「ちなみに、私とあなたたちはお互いに触れることはできないよ。この物は触れられるけどね」

僕たちは声が出なかった。

「あなた、名前は？」

「えっと、僕ですか？ 僕は蓮夜といいます」

「蓮夜……いい名前ね。私は麗。麗って呼んでね」

「は、はい。えっと、麗さん」

「改めてよろしく、蓮夜」

「はい、よろしくお願ひします」

麗さんと話している途中にふと、二人が何も話していないことに気付いた。彼らの方を見ると、眠っているようだった。

「彼らは始めから寝てたよ。私が蓮夜に幻覚を見せていたの。騙しでいてごめんね」

そう言っただけ麗は頭を下げた。僕はあわてて顔をあげるよう言い、理由を尋ねた。

「実は、彼らには私の姿は見えないの。それは声が聞こえていなかった時点でわかっていたことなんだけどね。実は、私の声を聞いたのは蓮夜が二人目なんだ。あと一人は蓮夜の学校の先生の一人なんだけどね」

「そう、なんですか」

「だから、唯一声が届いた蓮夜と話がしてみたかったんだ。その先生は忙しくてあまり来れないから」

麗のその口振りからするとおそらく、この森に入った人全員声をかけていたのだろう。しかし、その先生と僕以外誰も麗さんの声を聞くことが出来なかったのだろう。

「それで、お願いがあるんだ」

「何ですか？」

「私と友達になつてくれないかな？」

麗さんはそう言った後顔を赤くして、「な、何でもない！」と言った。僕は、麗さんの言葉が嬉しかった。僕はあまり積極的に話しかけるような性格ではないので、友達は彼らしかいなかったのだ。

「はい、よろこんで」

「ホント!? ありがとう!」

麗さんは眩しいくらいの笑顔を見せた。しかしすぐに赤面した後、「コホン」と咳払いをした。それがおかしくて笑ってしまい、麗さんに怒られたが、その後二人で笑い合った。

「もうこんな時間か……」

「そうだね」

楽しい時間はあっという間に過ぎ去ってしまった、今はもう夜の十二時を回ってしまっていた。そんなに長い時間外にいたのかと思うと驚いた。

「先生には言っておくから、放課後にでも来てくれると嬉しいな」

「はい、また明日にでも来ますね」

「……ありがとう」

「はい」

そうやって彼らを起こそうとすると、麗さんが、「あ、そうそう」と言って、柵から黄色の寶石のようなものが埋め込まれたネットレスを取り出し、僕にしつかりと手渡した。

「これを着ければ、ここまで迷わずに来ることが出来るから」

「きれいですね。ありがとうございます」

「うん。それと、彼らはこの家を出たらすぐに起きると思うから、そこまで運んであげてね」

「はい」

麗さんはそう言って、二人を運ぶのを手伝ってくれた。麗さんの言うとおり、外に出てからしばらくすると二人が目覚めました。何があつたのか覚えてないらしく、キョロキョロと辺りを見回していた。

麗さんのいた小屋はなくなっていた。さつきまでのことは夢だったのかな? と思ったが、手に持っていたネットレスがそれを否定した。ネットレスを首から提げてみると、目の前に小屋が現れた。さらに、ネットレスから小屋へ向かって一筋の光が延びていた。それを見て僕は、驚きよりもまず安心していることに気付いた。

二人は何がなんだかわからないといった感じだったが、「そろそろ帰ろう」と言うと、はつとした目でこちらを見て、「そこまで言うなら」と言って立ち上がった。

こうして僕たちの探索は終わった。森はすぐに抜けることができた。かなりの時間が経っていたので、当然のように学校は無人だった。僕たちはそのまま帰路についた。この日のことは、三人の間では禁句となった。

「これで六人目。随分集まったわね」

「……………」

森に囲まれた平原の中に二人の女性がいた。二人の背丈はかなりの差があり、端から見れば親子と思われていたであろう。

小柄な少女、麗は、悲しそうな顔で倒れている少年たちの内の一

人を見つめていた。

「その子が気になる？」

「そういうわけじゃないよ」

「嘘おつしやい。あなたが一時間も時間を使ったのは彼が初めてじゃない。それに、そんな悲しそうな顔初めて見たわよ？ 鈴といいあなたといい、やっぱり元が人間だからなのかしらね？」

「……………」

呆れたような声を出す女性に麗はムツとした顔をしたが、紛れもない真実であったため言い返すことができなかった。

麗自身、どうして悲しいのかよくわかっていなかった。しかし彼女にそう言われると、なるほどそうかと納得することができた。麗は、蓮夜に一目惚れしたのだ。

麗の仕事は、人間が結界を越えたらすぐに気絶させ、その後それぞれの記憶に入り込んでマーケティングをし、偽の記憶を植え付け家に帰す、という内容だ。しかし、ある少年の記憶へ入り込んだとき、麗はつい話し込んでしまった。もちろん記憶の操作は怠ってはいないが。

「それにしても、たった一人を謹慎処分にするだけでこれだけ広まるとは思わなかったわ」

「まったく、教師失格だよ？」

「教師とかどうでもいいのよ。とにかく、あと一人で全て揃うわ。それまでにあの本とあの子を見つけたいといけないのよ」

「それで、私の協力が必要なの？」

「ええ、あの子はじつとすることができない性格だしね。特にここは好奇心の塊じゃない？ て、ごめんごめん睨まないで。別に彼を貶したわけじゃないのよ？」

彼ら、ではなく彼と言ったことは気になるが突っ込まないでおこう、と麗は思った。彼女の発言をいちいち気にしていたら話が進まない。

「とにかく、あの子を見つけたら連絡を頂戴ね？ 私は引き続きあの

本を捜索するわ」

そう言っただけで彼女は結界の外へと出ていった。私は倒れている三人の少年たちへ目を向けた。

「……………」

蓮夜は明日も来るだろう。記憶操作中にそういう約束をしてしまった。一度操作してしまった記憶はもう変えることができない。

「ま、まあ……別に嫌というわけじゃないし……」

その後、平原に残された麗は一人で、朝までゴニョゴニョと呟いていた。

夏休み。

あれから僕はほぼ毎日麗さんの家を訪れるようになっていた。生前の麗さんは三年生だったらしく、課題のわからないところを教えたり、お菓子を作ったりしてくれた。時には小屋にある本を読むだけの日もあったが、それでも僕の生活は充実していた。

ある日、麗さんは「話があるの」と言っただけで僕と向かい合った。その表情はとて真剣だった。

「夏休みが終わって二学期になったら、その……私との縁を切ってほしいの」

「え？」

どうして、と聞こうとしたが、麗さんのつらそうな表情を見て、口から言葉が出なかった。麗さんは続けた。

「私は幽霊で、蓮夜は人間だから、ずっと一緒に、というわけにはいかないの。だから、これを言うのは早めの方がいいかなって」

「それは……」

僕は何も言うことができなかった。麗さんの言いたいことがわかったからだ。

「あ、別に今すぐってわけじゃないよ！ 夏休みが終わった辺りから冬休みにかけて、ゆっくりでいいから」

「麗さん」

僕は麗さんの言葉を遮り言った。

「僕は、麗さんと別れるのは嫌です」

「っ！ えつと……」

麗さんは嬉しそうな顔をしたが、すぐに悲しそうな顔をした。

「でも」

「別にいいじゃないですか。僕はこの学校を卒業しても、ここに来ますよ」

「それは、嬉しいけど……」

モゴモゴと何か言っている麗さんに、僕ははっきりと言った。

「麗さん。あなたが好きです、付き合ってください」

「え!? えつと……」

「幽霊とか、人間とか関係ありません。僕は麗さんが好きなんです」
僕の心臓がバクバクと鼓動を早めている。勢いで言ってしまったが、後悔はしていない。

麗さんはしばらくの間赤くなっておろおろしていたが、深呼吸をして落ち着いたらしい。小さく、けどはつきりとした声で言った。

「い、いいよ」

「っ！ ありがとうございます！」

「その代わり、これから私に敬語は使わない！ いい？」

「はい、善処します」

「いきなり使ってるよ！」

「あ、すみま……じゃなくて、ごめん」

「まったく」

「……はは」

「……ふふ」

こうして、僕たちは付き合うことになった。片や幽霊。片や人間。それでも構わなかった。ただ、僕たちは幸せだった。

夏の思い出

如月 吟

八月に入ったからか、蒸し暑い。窓を開けて、扇風機をつけても暑い。午前中のはずなのに汗が止まらない。俺は、部屋の中で横になって、暑いと思いつながらスマホをいじっていた。しばらくすると着信が来た。通話にすると、

「もしもし！」

テンションのすこぶる高い声がスマホ越しに聞こえてきた。その声を聞いて返事が面倒になったが、とりあえず返事をした。

「……もしもし。どちら様ですか。」

声の主については知っていた。知っていたが、何となくそう返した。すると、

「お前の親友の佐藤冬馬だよ！」

親友とは少し違い、冬馬とは腐れ縁のような関係だ。

「突然だが、明後日海に行くぞ！」

「……えっと、もう一度言ってくれませんか？」

男二人で海に行こうと言ったのか？ いや、聞き間違いだろう。

「だーかーらー、一緒に海に行こうって言ってんだよ！」

聞き間違いではなかった。こいつは何が言いたいんだ。何で、男二人で海に行かないといけないんだ。意味がわからない。そう考えていると、

「あと、旅館を予約して一泊するから。異論は認めん！じゃーな。」

「あつ、ちよつ……」

電話が切れた。一方的に誘われて、何も言えずに切られてしまった。だが、八月中には何もなかったため、冬馬の態度に少し苛立ちながらも旅行の準備を始めた。

電話があった日から二日が経った。今は、親友の冬馬と二人で海

に来ている。なぜ、男だけで海に来ているのだろう。そう考えている俺の隣では、

「海だー！」

高校生のはずなのに、小学生並みにはしゃいでいる、イルカの形をした浮き輪を抱えた冬馬がいた。なぜ、イルカなのだろう？

少し沖の方に出て、足がギリギリ着くぐらいの場所で浮き輪に乗ってのんびりしていた。目の前では、冬馬が浮き輪に跨ろうとしていた。足を滑らせたり、手を滑らしたりして悪戦苦闘している。なぜ、イルカ型の浮き輪を選んだのだろう。そんなことを考えていると、

「乗れ、あつ！」

冬馬が手すりから手を放してバランスを崩したため、海にダイブした。いつまでしているのだろう。こんなことを繰り返して、時間だけがただただ過ぎていった。

時刻は正午、俺と冬馬は腹が減ったため浜に上がって海の家に行った。その道中で、

「あんた達、こんな所で何しているの？」

同じクラスの女子三人が話しかけてきた。すると、冬馬は

「海に遊びに来たんだ！」

楽しそうに、嬉しそうに話した。その返事を聞いた女子たちは、

「……そっか。楽しんでいきなよ。」

と穏やかな表情で言つて、海の方に向かった。俺は今の会話に少しだけ違和感があった。さっきの女子たちの表情が少し穏やかすぎたように見えた。いや、気のせいなのか？俺は、気のせいだと考えて、海の家に急いだ。

午後も、海で遊んでいた。冬馬はまた、浮き輪に跨ろうと悪戦苦闘していたが、

「……飽きた。」

と言つて浜に上がった。今更かよ……、今更止めんのかよ。ただただそう思った。しかし、

「次は、遠泳だー！」

と叫んで、クロールで泳ぎ始めた。

「ええー！」

俺は、驚きすぎて叫んでしまった。今から遠泳かよ。海であれだけ遊んだのにまだ泳げるのかよ。あいつ、どれだけ体力あるんだよ。俺はそんなことを思いながら、冬馬のこと放っておいて浜に上がった。

夕方になり、俺達は予約した旅館の部屋でテレビを見ていた。話のネタが無く、海で泳ぎ付かれたこともあって、部屋はテレビから流れる音声しか聞こえなかった。そんな空気に耐えかねたのか、冬馬が、

「海水で体がべたついて気持ち悪いから、風呂に行こうぜ！」

と提案してきた。確かに身体がべたべたして気持ち悪かった。しかも、もうすぐ夕食だ。だから俺は、

「別に、良いぞ。準備するから、待っていてくれ。」

と言って、部屋にあった浴衣に着替えた。

旅館の浴場には露天風呂があった。それを見た瞬間、

「露天風呂に入ろうぜ！」

と目を輝かせた冬馬が言った。露天風呂に入ること自体は良いのだが、男子高校生が目をキラキラさせていうのはどうなんだ。はたから見ていてとても恥ずかしくなる。そう思いながら、

「おう。」

と短く返事し、露天風呂の方に行った。

窓からだと曇っていてよく見えなかったが、外の景色がともきれいだっただ。夕日が射っていて空がオレンジ色に染まっていた。すると、

「すっげー！」

と俺の隣で同じように景色を見ている冬馬が感想を言った。たったそれだけかよ。それだけなら小学生の感想になるぞ。俺は、コイツの将来がとてつもなく心配になった。そんなことを考えていたら、

「熱ッ！イタアアアアアアアア！」

と冬馬の悲痛の叫びが聞こえた。

「どうした！」

冬馬の方を見た。瞬間、痛がっている原因が分かった。俺は、海に入る前に日焼け止めを塗っていたため少ししか焼けなかった。それに対し、冬馬が日焼け止めを塗っているところを見ていない。また、俺と比べて肌が真っ赤に焼けていた。そして、露天風呂は外にあるため、お湯の温度が高めになっている。火傷状態の肌にお湯をかけているのだ。俺は、

「日焼け止め、塗ってなかったのかよ……」

と呟いて、痛がっている冬馬をどうするか考えた。

部屋に戻り、夕食を食べた後、露天風呂で痛い目に遭った冬馬が、

「散歩に行こうぜ。」

と少し疲れ気味に言った。風呂でさっぱりしようと入ったら、激痛が体中を襲ったのだから仕方がない。俺は、少しかわいそうに思ってた、

「じゃあ、行こう。」

と言って、荷物の中にあるスマホを持って散歩に出かけた。

散歩にまで来たのは、昼間遊んだ海だった。昼間とは違い、涼しい風が吹いていて心地良かった。ただ、隣にいる冬馬の手のあたりを見ると、大きめのビニール袋があった。気にしないようにしたが、気になってしまった。なので、

「……さっきから気になってたんだけど、その袋は何？」

と聞いた。すると、冬馬の顔が輝いた。待ってましたと言わんばかりに。

「その質問、待ってました！」

口に出しちゃったよ。そんなこといいから、早く言ってくれないかな。そんなことを考えている俺のことはお構いなしに話を進めた。

「中には花火、ろうそく、マッチがありまーす。ここあたりで花火

をやるうぜー！」

冬馬はそう言いながら、瞳を輝かせていた。俺は、そんな冬馬のことを無視して、とある疑問をぶつけた。

「この浜は、花火して良いの？」

数秒間の沈黙の後、冬馬は、そんなこと考えてなかったという表情でこちらを向いていた。確認してなかったのかよ。俺は少し苛つきつつ、近くに閉めようとしていた海の家を発見し、確認した。

「この浜は珍しく花火が許可されているんだ。花火って書いてあるテントでバケツを受け取れば、花火ができるんだよ。」

海の家の人に丁寧教えてもらった。そして、テントを探し始めた。あたりは薄暗いため見つけにくいと思っていたら、あっさり見つけた。

「めっちゃ早く見つけたな。」

「ああ。」

軽く会話を交わしながら、水の入ったバケツをテントで受け取った。そして、冬馬は花火の準備を始めた。俺は、周りで花火をしている人のことを見ていた。あまり知られていないのか、人は予想以上に少なかった。

「準備できたし、やるうぜー！」

冬馬一人で花火を準備していたことに、申し訳ない気持ちになった。周りを確認する暇があったら、手伝えれば良かった。そう思いながら、「おう。」

と返事して、花火一本を手を持った。

いざ花火をしてみれば、結構楽しかった。だが、表情には出なかった。隣にいたのが、

「めっちゃ明るい！楽しいー！」

と小学生並みにはしゃいでいる冬馬だからだ。ここで俺もはしゃげば、ストッパーがいなくなってしまう。だから、俺は表情には出さずに花火を楽しんでいた。そんな感じで、しばらくの間俺達はいやなことを忘れるかのように花火を楽しんだ。

旅館への帰り道、ふと冬馬の方を見た。冬馬の様子がいつもと違い、思い詰めているような寂しそうな表情をしていた。俺は、「どうかしたのか？」

と聞いた。一応親友だから、力にはなりたくない。そう思った。冬馬はすぐにいつもの表情に戻し、

「なんでもない。」

と返した。さっきの表情をして、何でもないわけない！そう思ったが、形式上親友である俺には相談できないのかもしれないとも思った。だから。

「……そっか。」

と返事した。かける言葉が見つからなかった。

翌日、俺達は昼過ぎに発車する新幹線に乗って家に帰った。俺の隣には冬馬が座っていて、

「旅行楽しかったな！」

と声をかけてきた。その表情には、昨日のような暗い感じはなかった。ただ楽しそうだった。俺は、

「ああ、そうだな。」

と短く返事した。新幹線に乗っている間、冬馬の様子を見ていた。だが、いつも通りの冬馬だった。昨日のことは、勘違いか何かだったのだろうか？俺はそう考えるようにした。

旅行の後、残りの夏休みは淡々と過ぎていき、二学期に入った。久々に会った友人がたくさんいた。

「久しぶりだな。」

そう声をかけたり、かけられたりと朝休みは少しだが新鮮味があつた。

チャイムが鳴り、担任の教師が入ってきた。そして、

「佐藤君からお話があります。」

いやな予感がした。

「この学校から転校します。」
分かった。海であったクラスメイトの女子達の雰囲気、花火をした夜の冬馬の雰囲気の原因が分かった。そして、そのことを知らなかったのは俺だけだったことをこの時知った。みんな、知っていたような雰囲気が出ていた。

放課後、俺は屋上に行った。何かあったときはここに来ていたからだ。屋上の扉を開いた。すると、
「遅えぞ。」

冬馬の姿があった。俺は返事をせずに、冬馬の隣に座った。そして、
「何で俺には言ってくれなかったんだよ。」

そう言った。思ったことを口に出した。親友のはずなのに、相談してくれなかったことが悔しかった。冬馬は、しばらく黙っていた。何も言えなくなったのか？そう考えたとき、

「親友だったから、言えなかったんだよ。言おうとしたけど、口から声が出なかったんだ。」

「……そうか。」

短い理由だったが、それでもよく分かった。だから、ただ返事することしかできなかった。屋上では、二人が何も話さずにただ座っていた。そんな静寂を破ったのは、冬馬だった。

「別れた顔が暗い顔はいやだな。」

「ああ、そうだな。」

短い会話だった。その声の調子はいつもより暗いものの、吹っ切れた感じがあった。そして、

「じゃーな。冬馬。」

「おう、じゃーな。」

いつもとは違う別れを、いつも通りに別れた。

晴天の独り星

みのすけ

病棟の夜は静かだ。生と死の境だからなのか、それとも単に裏では看護師や医師が東奔西走しているからなのか、一介の入院患者である僕には分からない。ここはサナトリウムでもなければホスピスでもないの、生と死の境、という表現は通らないだろう。もちろん、ただ腕を骨折しただけの僕にそんな命の危機は訪れていない。

凍てつくような寒さが、昼にも増して襲い掛かってくる。昼の間は太陽が出ているからましだったのだろうが、昼間とは格段に違う夜の冷たさがそこにはあった。ほの暗い月光で青白く染まった廊下は、その色も相まってか、心と身体に寒さを感じさせる。窓に目をやると、細く弓型になった月が、ただ光るだけの街明かりの上に浮かんでいた。

普段は人の行き交っている街でさえも、活気を失ったようで、それが、家で暖かく過ごしているからなのか、はたまた人々の心が疲れ切ってしまったからなのか、僕にその判断はつかない。どこか、家々の光もおぼろげに感じてしまう。

「ん？」

非常灯の光の下、何かが横切った。辺りに人影はなく、どことなく不気味な、夜の空気が広がっているだけである。あつちは、屋上へと向かう階段だろうか？ 屋上に通じるドアは施錠されており、僕もある目的で向かおうとしたのだが、屋上に入ることすらかなわず、少しがっかりした記憶がある。

急いで階段に向かうも、そこには誰もいない。もう上に登ったのだと考えると、至極当然のことだった。階段の躍り場は心なしか暗く、僕の足元はあまり見えないため、とても心もとない。今日の月もおぼろげで、今晚はそもそも幽かな夜なのだろう。

静かに、しかし急いで階段を登る。息をひそめて階段の上を窺い、

人影を探すが、階上の様子は分からない。

屋上へ続く扉、そこにいるであろう何者かを視界に収めるべく、一段飛ばしに歩を進める。誰なのか知らないが、一体こんな時間に何をしているのだろうか、という疑問が脳裏をよぎった。

そのとき。

「何してるの？」

「え、あ、あれ？」

歪んだ夜の空気を裂いて、誰かが僕の背後から問う。

扉の前には何者の影もない。僕の見間違いだっただけか？

振り向くと、そこには一人の少女がいた。手には望遠鏡を持っている。服装は丈の短いマウンテンパーカの下にシャツ、そして一番目立つのは帽子——ディアストーカーだ。長い髪がはみ出ている。

「いや、今さっきそこに人がいた気がして」

「人……ふうん、人ね。見間違いじゃない？」

「見間違い……」

こんな夜だから、幻でも見たのだろうか。本当に幽霊でも見たのかもかもしれない。

「そのケガ、どうしたの？」

包帯で吊るされた僕の左腕を指して、彼女は当たり前前の疑問を投げかける。僕はごちゃごちゃした頭の中から、自分の怪我に関する記憶を引っ張り出した。

一番に思い出すのは、白と赤。めでたいと言われる色だが、それは骨と肉の色。目の前ではじけ飛んだ死体を見ても、めでたいとは思わないだろう。

夕暮れ時、下校時刻はとうに過ぎていて、大あくびをしながら家路に着いていたときのことである。大学病院——恐ろしいことに今いるこの病院である——の横を通る途中、上から悲鳴がしたかと思うと、突然何かが降ってきたのだ。想像してほしい、高さ三十メートルから自由落下した人間の身体がどうなるか。

最後に見たのは宙を舞う身体の一部、それがまっすぐ、自分の顔に飛んでくる光景だった。結果、咄嗟に腕でかばい、腕を折るという形で終わった。

幸か不幸か、目の前に病院があつたので否応なしに運ばれたのである。

「人が降ってきて、それが落ちた後、破片が腕に当たつたんだ。飛び降り自殺だつて聞いた」

覚えてる限り、あつたことを手短かに話す。

僕は、それ、だとか破片、などと答えたが、人間は死んだその瞬間から物になるのだ、と改めて思い知つた。魂や意思から切り離された肉体は、もはやただの精巧な機械だ、とどこかで知つているのかもしれない。

「ふうん……じゃあ、私はこれで」

彼女は話を耳を傾けているかと思つたら、話を終えた途端横を素通りし、悠々とした足取りで階段を登ろうとした。興味があるのかないのか判断に苦しむ。

「え、どこに行くの？」

僕の口を衝いて飛び出た質問に対し、クエスチョンマークを浮かべ、親指で屋上を指す。沈黙がその場を瞬時に覆つた。彼女は返事を待たずに、ドアへと向かう。

「屋上なら閉まっているはずじゃ……」

がちやりと、聞こえるはずのない音が、僕の言葉を遮つた。凍り付くような冷たい風が、僕の頬を撫でる。首筋を舐める空気に身震いを一つすると、彼女へと視点を戻した。

「開いてるけど？」

それが何のこともない、当たり前のことであるかのように言うので、僕に向かって言葉を続ける。唇が滑らかに動いた。

「そんなところに立ってないで、あなたも屋上に来たらいいよ」

今宵の月は美しい、と詩的に言つて、すらりとした細い手を差し

伸べる。開け放たれた大きな扉から弱々しい光が差し込んで、彼女に後光が差したように見えた。床に差し込む影とぼうつとした月光、そして不敵な笑顔。それらはとても曖昧で、僕を惑わすには十分だった。

屋上に出て、空を見上げると、そこは一面真っ暗だった。対して、地面は青みがかつた白で、雪景色と夜、という組み合わせが頭に浮かぶ。屋上には誰の影も見えない。

フェンスの外、街の明かりはまだ煌々と灯っている。まだ九時を少し回つたほどの時間なのだ、むしろこの明るさでもまだ暗いと感じるほどのものである。

「……街が暗い」

「いや、十分明るいでしょう？」

ふと呟いた僕の言葉に対して、彼女は疑問げな声でそう聞き返した。

「確かに明るいけど……普段と比べたら、暗い」

そこまで言つたら本当に暗くなっているのか不安になって、尻すぼみになりながら「気がする」と付け加えた。

「……あなたは、なんで街では星が見えにくいか知ってる？」

彼女はフェンスに近づいて、地上に光る電灯の群れを見下ろし、バカにしたようにふふんと笑う。それは何故か、僕の目にはつまらなそうに映つた。

「いや……知らないけど」

実際のところ、メカニズムは知らない。

「……そう」

次の瞬間に彼女は、納得したような声を上げて、不敵な佇まいに戻っていた。無知であることを憐れむような目を向けてきたので、知識がすべてじゃないと心の中で唱える。知るは一時の恥、知らぬ

は一生の恥。

「理由は二つあってね。一つ目は、空気中のゴミ。それは日常生活を送る上では困らないほどのものだけど、遠くを見ようと思うと話別。何十メートルにも重なった空気には、もはや光を通さないほどのゴミが含まれている」

「空気の汚れ。つまり、埃だらけの中ではものが見えにくい、という現象のスケールが大きくなったもの、ということだろうか。空を眺めても、そんな汚れているようには見えない。」

「二つ目は……街が明るすぎるよ」

「街が明るすぎる？」

先ほども彼女は言っていた。この街は十分明るい、と。

「明るすぎると、星の光が目立たなくなるんだよ。地上の方がよっぽど明るくて、目に入る光はどうしても、人工の光になってしまう。星を見るにあたっては、不利な環境だと思うよ」

「へえええ……」

知らなかった。素直に、そんな声が漏れる。

「まるで、星が追いやられているようだよね。みんなが自分たちのために光を得て、気が付かないうちに星は見えなくなっている」

大きく息を吐いて、彼女はフェンスに寄りかかる。白い吐息は、冬の寒空に溶けていき、薄汚れた空気の中、境界線を失っていった。

「だから、今は星が見えないんだ」

ほら、と彼女が指さす先には、黒い宇宙が広がっている。もちろんそこに煌く星はなく、嵐の海を思わせる混沌のみがあった。それは普段の夜も同じ光景ばかりで、新しさもないはずだったが、こうして病院の屋上で見ているからか、新鮮な感覚に襲われる。

「星か……見たのはいつが最後だろう……」

ぼつりと呟く。

数か月前か、はたまた数年前か。僕が少し前に屋上に入ろうとしたのは、ここから星が見えないだろうか、と考えたからだった。そう考えると、僕は思っていたより星が好きだったらしい。

「世界は集団で回っている……この地球は人間でできていて、それはもはや、宇宙という広大なものにさえ影響を与えて、私みたいな矮小な一人の意図なんて、何一つ叶わない」

星だっで見られない、とくすくす笑う。フェンスの前で大きく腕を広げ、空を仰ぐその姿は、そのまま夜の虚空へと落ちていきそうに見えた。

「時間まで長い……こつちに來たら？ 立つたままだと寒いでしょう？」

彼女は軽く欠伸をして、退屈そうに言った。手に持っている望遠鏡はもはや無用の長物となっている。僕は彼女がそう提案したので、彼女と少し離れたフェンスにもたれかかった。上着越しに感じるフェンスの冷たさが、むしろ気持ちいい。

屋上の冷たい空気は、いまだに流れ続けているが、僕はそれほど寒いとは思わなかった。僕の夜はまだまだ過ぎていく。

「世の中って窮屈だよ。みんな他人とか、集団とかいう概念に縛られて」

「学校からしてそんなものだと思うけど」

夜も遅くなる頃、僕は彼女の愚痴を聞いていた。いや、愚痴と言うには出まかせて喋っているように聞こえたので、本気で不満に思っているというわけではなさそうだった。

「生きたい場所が自分の生きるべき場所だよ」

「そんな上手く行くわけがない」

僕の言葉に対して、これは理想の話、と後付けする。少しむつとしたような、呆れたような顔でそんなことを言われたので、一応納得したふりをする。

「例えば、居心地悪い集団にいたとして、みんなから嫌われたらすぐに爪弾き者になって、しかもそれをみんな言わないから、嫌な空

気になる。結果、悪循環になってやがて爆発するんだよ。しかも現実でそうなるから質が悪い」

「人間って、そんなものだと思うよ。特にみんな集まったら、嫌いな人だって増えるし」

不満を抱えていたって、口に出せない。そんな人間と仲良くしているぐらいなら離れた方がいい。そもそもの話、不満を口に出せないのが不満になるのではないか、と思う。

「……人間は集まれば、それは一人の人間の集まりじゃなくなつて、『集団』という一つの生き物になる。そうなつたら、一人の人間にできることなんて、たかが知れてるよ」

世界は大きいよ、と笑つて、彼女は時計を見た。少し呆けた顔をして、すぐに元の表情に戻る。

「意外と長く喋つてた……間に合わなくなるよりましかな」

「間に合わなくなるって、何が？」

「星を見る時間」

彼女は短く言うと、携帯電話を取り出し、どこかに電話をかけた。空は暗く、街の光に飲まれて星は見えない。一体、どうやって星を見るのだろうか。

「え、でも、空は……」

突然辺りが暗くなる。周りがほとんど見えなくて闇の中に閉じ込められたような気持ちだ。慌てるも、ぐつと腕を掴まれ、我を取り戻す。

「ね、綺麗でしょう？」

彼女は僕の手を引いて、満足そうな顔を寄せてくる。僕に問いかけてくる声ははしゃいでいて、とても楽しそうだった。

空にはおぼろげながらも星が瞬いていて、消えそうだった月は本来の輝きを取り戻している。山並みは星々に彩られ、屋上に開けた世界は普段よりも開放的に僕らを見つめていた。

白いはずの地面は暗くなつていて、そこでやつと、街の光がなくなつたことに気付く。眼下の街は輝きを失い、どこまでも広がる

海のようにその闇を湛えていた。いつもの景色から光がなくなるだけで、こんな幻想的な風景になるなんて。

「は、はは……すごい……」

「電灯は星を見るには邪魔でしかない」と今証明されたね」

ふふん、と彼女は自慢げに笑つた。

「つてことは……やっぱ、君が？」

「さあね、私は電話をかけただけだよ。私が星を見に来たタイミングで、偶然大規模な停電が起きたに過ぎない」

彼女は明らかに偶然ではないだろう出来事を、たまたま起こつた出来事として、冷静に語る。もはや清々しい。

「はは……そうですか」

今はそういうことにしておこう。この事実を知るのは僕だけだから、しばらく胸の中にしておくことにした。

「まあ、停電が起きたことでまずいことになる人はいないし、今はこの広い星空を楽しみましょう？」

「……………」

彼女は不敵に笑つて、僕は不思議と口元が緩む。

今までの人生で、世界が一番美しく見えた。

僕は停電が復旧した頃合いを見計らつて、病室へと戻つたが、彼女は屋上はまだ用事があつたようで残ると言つていた。何の用があるのか疑問に思つたものの、

そして翌日、彼女は僕の病室に現れた。

フレアスカートにブラウスという格好も手伝つてか、陽光の下に見る限りは神秘的な空気も薄れている。

「なんで今度はここに……」

「とりあえずメロンを持つてきたよ」

何故かは知らないがメロンをそのまま持つてきて、スライド式の

机の上に置いた。こういう風を持つてくるものだっただろうか。

「ちよつとした報告にね」

「報告？」

どこからか取り出した包丁で、メロンを縦に割ると、スプーンで種をかき出していく。半分は僕に差し出し、半分は自分で食べた。

「まあ、食べながら聞いて」

「は、はあ……」

本人が食べながら話しているし、いいのだろうけど。

「さて、まず前提として、あなたの目の前に落ちてきた人について」

「うん」

メロンのチョイスがいいのか、このメロンは美味しい。みずみずしさと甘味が口の中から浸透してくる。

「そもそも自殺だと言われていたらしいけど、私はそこに疑問を持つた。自分から飛び降りた人が悲鳴なんて上げるのかな、って思ったから調べ始めたの」

「でも、上げるかもしれない」

「確証はなかったよ。きっかけに過ぎない疑問だったから……話を戻すね。屋上は散々探された後だと思つて、とりあえず人が落ちた側の道路を屋上から覗き込んでみた。この望遠鏡で」

それは、昨日も星を見るために使つたその望遠鏡だった。

「そうしたら、病院の窓に何か引っかかっているのが見えた。これは当たりかなつて思つてたら、そこで突き落とされそうになつたんだ」

「え？」

聞き間違ひではなく彼女は、突き落とされそうになつて、と言つたが、そんなのんびりと言うことじゃないだろう。

「……あれは大変とかいうレベルじゃなかつたけど、話を聞いてくれたからよかつたね」

「……………」

何故突き落とそうとするような人が話を聞くのか。答えは彼女が

示してくれた。ブラウスのすその部分を持ち上げると、そこには黒光りする拳銃が挟み込まれていた。

街を停電させたり、拳銃を持っていたり、一体彼女は何者なのか。「で……ちよつとお願ひしたら自白してくれた。服の端が破れたらしくて、その破片が窓に引っかかつてたみたいね」

僕のベッドから離れ、窓に開けると、何か拾つて戻ってきた。白い布の切れ端だ。これがつまり、彼女の言う犯人の服、その破片なのだろう。

「なるほどね……で、逮捕？」

「そんなわけないじゃない」

あつさりと言ひ放つた。これが彼女らしさか。

「まあ、それ使つて得た情報で逮捕はまずいよね……」

「疑問は消えたんだから、問題ないでしょう？」

彼女は胸を張る。

「屋上に消えていった影は犯人で、鍵が開いてたのも犯人。つまり謎が解けたのもそのおかげね」

「なるほど……」

腑に落ちた、という感覚がピツタリだ。

僕が見たのは幽霊ではなく実在する人間で、鍵が開いていたのに理由はあつた。そこで、頭に疑問が湧く。

「……つてことはもしかして、僕らが星を見ている間、犯人は屋上に」

「いたらしいよ」

「……………」

二人しかいない病室で、声にならない悲鳴と嘔み殺したような笑い声が響いた。

「大変な入院生活だった……」

入院から一か月。僕は退院しいつもの生活に戻っていた。

季節はもう三月で、今日は終業式だ。終業式だけに出席する生徒というのは生徒なのか疑問が残るが、行けるなら行った方がいいだろう。かく言う自分も家族に行けと言われた。

いつもの通学コースを歩くと、例の大病院の横を通るが、どうしてもあの不思議な夜のことを思い出す。

その夜の停電はほんの十分ほどで収まり、原因は設備の不具合ということが決着がついたらしい。明らかに違うと知っている僕のような人間ならまだしも、普通の人は疑問どころか、興味を持つことすらなかったとのことだ。

校門にたどり着くと、聞き覚えのある声が聞こえた。

「あ、退院したんだ？」

「……なんで君がここにいるのさ……」

あの日以来会っていない彼女が、この学校の制服姿で立っているのだ。嫌な予感しかない。

「私もこの学校に通ってるんだ」

そんな説明は必要ないかな、といたずらっぽく笑う。桜の木の下、寄りかかる姿は至って普通の女子生徒である。

「いや、意外と気づかないものね、偶然、偶然」

彼女の言う偶然はほぼすべて意図的なのだと、一日と経たずには思いついた身からすれば、この言葉に恐怖以外覚ええない。確実に、調べ上げたのである。

「ああ、そうだ、自己紹介まだだった」

ふと思いついたように、そんな言葉を口に出す。やめてほしい。まるでこれからも仲良くするみたいじゃないか。

「私は北見千年、よろしくね？」

「はは……よろしく」

差し出された右手を、躊躇しつっ同じ右手で握る。握手とはこんなに緊張するものだったのか。

「僕は……」

「いや、知ってるよ、病室に名前があつたからね」

ね？ 南芳人くん、と彼女は言う。

桜の木がざわりと揺れ、独り星を見る少女は不敵に笑った。

缶蹴り

ツリウム

もう昔の話になるが、僕は頻繁に缶蹴りをしていた。

鬼が逃げる者を見つければ缶を踏んで捕虜に出来るというあれだ。僕はその缶蹴りがめつぼう強かった。逃げるときは鬼に見つからず、仲間を助ける時は損害を出さず一息に全員を助け出すことが出来た。鬼になれば味方がおらずとも十分あれば全員を捕まえられる。しかしそれは、僕の幼稚園からの親友である『あいつ』がいなければの話だ。僕らはどちらとも頭が悪く、運動もそれほど得意ではなかったが、缶蹴りとなれば僕と『あいつ』の右に出る者はいなかった。



その日、僕らは二人きりで公園にいた。

前日に『あいつ』が言ったのだ。「缶蹴りの王者を決めよう」と。突然のことに僕は戸惑ったが、ここで逃げては男が廃ると思ひ、二つ返事でその話を受けた。

「お互いに鬼をして、相手を捕まえるまでの時間が短かった方が勝ちだ」

『あいつ』はそう言って、黄色っぽい砂の地面に缶を置いた。

「分かった、そうしよう。負けても泣くなよ？」

「それはこっちの台詞だ」

正直に心の中を吐露すれば、僕は怖かった。彼に負けてしまえば

缶蹴りという僕が持つ唯一の取り柄が、価値の無い只の紙屑になってしまうような気がしたのだ。自分を奮い立たせるように彼を挑発すると、普段は怒りっぽい『あいつ』がどういふ訳か不敵に笑いながら挑発を返してきた。「今日の『あいつ』はどこか違うぞ」と、どこか輝いているように見える『あいつ』の目を見てそう思った。

「先にどつちをやりたい？ 選ばせてやるよ」

「……なら、先に逃げる」

不意に『あいつ』が先制の選択権を僕に投げかけてきた。普段の僕ならその相手を見下したような提案など突っぱねていただろうが、僕は恐怖に耐えきれず受け入れてしまった。それでも僕は心の中でほくそ笑んだ。僕は逃げる方が圧倒的に上手いのだ。

「わかった。じゃあ俺が先に鬼をやろう。さあ、蹴ってくれ」

そう言って『あいつ』は缶を指差した。僕はどこかもやもやとした気持ちを抱えながらも缶を蹴った。



結果から言えば、僕はすぐ『あいつ』に捕まってしまった。

缶を拾ってたつぷり十秒数えた『あいつ』はしばしの時間をかけて僕を見つけ、そのまま走って缶を踏んだ。本当にそれだけだ。タイムは二分三十秒。逃げるのが僕一人であることを考慮しても相当に早い。

言い訳をさせてもらえるならば、僕は思い違いをしていた。普段と同じ要領でこの缶蹴りに臨んでいたのだ。いつもの違い、それは捕虜の有無だ。捕虜がいる程鬼は動きにくくなり、すぐに捕まらない僕はどんどん有利になっていく。しかし今回はその足枷が存在

しない。『あいつ』は最初から最後まで僕を見つげるためだけに行き出来るのだ。

ともあれそんなことを言っているも始まらない。条件は『あいつ』も同じなのだ。さっきの『あいつ』より早く捕まえてみせるさ。

そう考えて僕は『あいつ』に缶を蹴るよう促す。『あいつ』は口元だけでにやりと笑って脚を振り抜くと、小気味よい音を立てて缶が飛んでいった。

◆

もうすぐ二分だというのに、『あいつ』が見つからない。遊具の裏、茂みの中、男子トイレ、もしやと思って女子トイレも探した。

しかし『あいつ』はどこにもいない。どういふことだ。この公園で隠れられそうな場所は全て探した。見落としなどあり得ない。

僕が呆然としていると、どこからか音が聞こえた。葉の揺れるような音だ。僕は慌てて振り返るが、そこには誰もいない。そこで、僕の頭に悪魔的な考えが浮かんだ。きつと『あいつ』はあの辺りにいる。ならば、「見た」と主張すればそれは通ってしまうのではなにか。思いついた後は早かった。

「みーつけたー！」

そう叫ぶと、僕は缶へ向かって全力で走り出した。後ろからは葉の揺れるような音が先程より大きく鳴っている。どうやら賭けは成功したらしい。ちらりと後ろを振り返ると、『あいつ』は公園にたった一本生えている大きくも小さくもない木から降りている最中だった。走り続けながらも、僕はなるほどなと思った。『あいつ』は木に登れないという先入観があったし、何より木の上は缶蹴りと相性が悪いのだ。なぜならその場所で見つかってしまった場合、木から降りるのに時間がかかって、どうあがいても鬼より早く缶に辿り着

くことが出来ないからだ。僕は『あいつ』がそんな初歩的なミスを犯すはずがないと、高をくくっていた。だがよくよく考えてみれば、今回の勝負に限ってそれは有効な手段だ。時間で勝敗が決まる以上、制限時間まで逃げ切れればそれでいい。僕は完全に『あいつ』の策略に嵌まっていたのだ。しかしタイムは二分二十五秒。僕は『あいつ』に勝った。勝ってしまった。

「あー、負けちゃったか。やっぱり小手先の作戦じゃお前には勝てないな」

しばらくして、缶を踏んだ僕に『あいつ』が息を荒げながら近づいてきた。「違うんだ」と僕はそう言いたかったが、『あいつ』に勝った優越感と、本当のことを話せば『あいつ』に嫌われるという恐怖から言い出せなかった。

「ごめん、ちよつと今日は帰るわ」

「あ、おい待てよ！」

『あいつ』の引き留める言葉を背に僕は走り出した。全力疾走の後で体力は底をつきかけていたが、何でも無い風を装って『あいつ』から僕が見えなくなるまで走った。角を一つ曲がった後、膝からくずおれた。『あいつ』は追ってこなかった。僕は歩けるぐらいまで息が整っても、しばらくの間そのままの体勢でいた。『あいつ』は追ってこなかった。

◆

次の日の朝、僕は『あいつ』が転校したことを知った。

風の噂によれば、あの子の『あいつ』は有名な大学に行って大企業に就職して結婚して子供も作って、順風満帆な日々を送っているらしい。

僕はあの頃と変わらず、近所の子供と缶蹴りをしている。

或るサトリ警官の一日

小刀

星も見えぬほどの雲が覆う、ある町の一角。人気のない夜道を一人の男が歩いている。真っ黒のコートに身を包んだ、人によつては不審者だと言われそうな人物。

男が視線を動かす。そこにあるのは、いかにも『金持ち』が住んでいそうな大豪邸。門扉は固く閉ざされ、聳える壁からはほんの少し庭園の植物が見えるのみ。

ぱちん、と男が指を鳴らす。闇夜の黒と僅かな灯の白から成るモノクロの世界に、新たな色彩が追加される。目も眩むほどの橙。それは激しく揺らぎ、辺り一面を飲み込んでいく。しかし誰も気付くことはない。仕方のないことだろう、こんな時間に起きている人間など、そうそういないのだから。

炎が全てを飲み込んだその刹那、人が次々に集う夜道に、黒服の男はもういなかった。

「緊張するな……」

午前八時、都内にしては珍しく木造の趣を残す建物にて。背広に身を包んで姿勢を正した私は、入るか戻るかを決心が付かず扉の前に立ち尽くしていた。

手に持つ名刺をもう一度見る。「東京府東京市西区桐之下交番勤務 神山正吾 署長」、私をここに読んだ人物の名がはつきりと印字されている。あれは確かか月前だったか、

「君の身体能力と武道の心得に魅力がある、行く宛てが無いならば非警察に来てくれ」

などと言われたのは。実際就職の決まっていなかった私にとってはこの上ない好条件だったし、元警官の祖父も賛成してくれたからそ

の時は悩むこともなかったのだが、後々調べてみると結構なイレギュラーだったというのが今現在中に入りがたいと思う理由である。まさか警察学校への入学もなしに交番勤務になるなんて……。

「……まあここにいっても仕方ないか」

冬は過ぎたと言つても、まだまだ朝は寒い。いつまでもここに居たつて何も進まないし、何かが「読める」つてわけでもないし。半分諦めたような気持ちでドアを三回ノックする。面接でもないのに、どうぞという声で体が固くなってしまった。

「失礼します」

そう言つて入ると、まずいくつかの机と椅子が目に入る。しかしそこには誰一人として座つておらず、もつと言うなら机の上にも何が置かれている様子がない。間違えて綺麗な廃墟に来てしまったか、そんな馬鹿なことを考えていると奥の扉が開く。

「よく来てくれたね、こんな早いのに。時間に厳しいのはお祖父さん譲りかな？」

コツコツと靴を鳴らして歩く初老の男性は、さつき名刺で見たばかりの神山署長。すぐさま抜けていた気を引き締め、敬礼を示す。

「ほ、本日よりこちらで勤務することとなりました——」

「あ、そんなに固くならなくていいよ。どうせ人ないし」

ガチガチの自己紹介を止められ、ずっこけそうになる。ただ意図していたのかは知らないけど、緊張が解れてさつきより幾分楽な気分になった。深呼吸をして、途中から。

「木下冬袖と申します、よろしくお願いします」

その様子を見て満足気に頷く署長。そしてさつき出てきた扉を示し、口を開く。

「必要なものはこれから用意するから、君は着替えてくるといい。これから幾つか仕事もあるから、その恰好じゃ辛いだろうからね。私服は持つてきているかな？」

「はい、一応は」

「では行つてくるといい。ああ、覗いたりはしないから安心してね、

僕の命が危ないから」

「はあ……」

ひとまず着替えてこよう、話が進みそうにない。スーツを畳み、さつさと着替えて戻つてくると一つの机が各種小物で埋まっていた。手錠に警察手帳、警棒に警笛と手袋、あと何故かボイスレコーダー。手錠のカバーを外すと、そこには「巡査 木下冬柚」の文字がしっかりと記されていた。

「さて、早速で悪いんだけどね」

「はい」

向かいの椅子に腰かけた署長に促され、私も椅子に座る。二人だけで向かい合う様は、これから重大な密談でも始まるかのようだ。

「階級とか法規とか、いくつかの話はお祖父さんから聞いてるよね」

「はい」

ちなみに法律は例の話のあと勉強し始めた。法学部を出た人とか、本職の人には全然敵わないはずだけど二人曰く「それで十分」とのことらしい。

「なら話は早い。君にはこれから、僕に付いてきて貰って捜査のやり方とかを学んでほしいんだ」

「はい。……署長と一緒に、ですか？ 他の方は」

普通は署長が、というより署内の全員が出ていくなんてことは無いはず。そんなことをしたら誰かが来たときに対応できないのに。そう思つて署長に聞くと、彼はばつが悪そうな苦笑いを浮かべた。

「さて、君には悪い知らせが二つある」

「えつ」

悪い知らせと聞いて思わず声が出ってしまった。そんな私を置いて話は進む。

「一つ。君は最近話題になっている放火事件を知っているかな」

「あ、噂程度になら」

なんでも、あちこちの家で大変な規模の火事が頻繁に起こっているらしい。政治家とか医者とか、結構偉い人も被害にあつてゐるらしい。

いけど。もしかして、初事件がこんな大事件で苦勞するぞ、つてことなのかな。

「僕たちが担当するのはこれだ。昨日から言われてね」

「はい」

文脈から予想は付いてたけど、やっぱりそうか。まあそんなこともあるよね、事件が選べるはずないんだし。とにかく頑張ろう、と思つたところで。

「そしてもう一つ。この事件の担当だけど、僕たち二人『だけ』だから。頑張ろうね」

「……ええーっ!？」

わざわざ録音するまでもなく、今度の方が大きな悲鳴だった。

聞き込みのために歩きながら、話をまとめてみる。最近起こっている連続放火事件、元々は本庁が管轄していたらしい。噂程度にか知らなかったのは、被害者が被害者だからつてことで箝口令が敷かれていたから。けど本庁は本庁でより大きな事件を抱えることになったから、所轄のこつちに投げてきたつて事。しかも交番勤務の人員はほとんどその事件に動員されたから、残つてたのは署長と今日入つた私だけだつたと。無茶苦茶だけ上には逆らえないよね……それにしても。

「放火が小さく見えるほどの大事件ですか」

隣を歩く署長に話を振る。二人とも結構ラフな私服だから、年の離れた親子が一緒にいるように見えなくもない。

「ああ、『能力者』が多数絡んでるらしいからね。僕らみたいな一般人だと相手に困るからせて数は欲しいんだつて」

「能力者……上も大変ですね」

「全くだよ」

能力者。第三次大戦以降核の汚染に伴つて生まれてきた、その名の通り特殊な能力を持つ人間のこと。有名どころだと念動力とか、瞬間移動とかが使えたりする。ただ千人に一人くらいしかいない上、

悲しいことだけど「得体のしれないモノ」を持つてゐることで彼らを差別する人間も少なくない、というか圧倒的に多い。能力犯罪者も増えてきてゐるし仕方ないと言えそうだけど。だから大抵能力者は自分の能力を隠して生きてゐるだけど……。

彼の顔から目を逸らし、意識を集中する。車の音や風の音、木々の音に混ざつて、

『それだけ人が必要なら、式典なんてやつてゐる暇もないだろうに』口を閉じてゐる筈の彼から『声』が聞こえてくる。そして意識を切ると、

『――』
また元通り。この間私たちは、一言も声を発してゐない。なのに私は『声』を聞いた。

「さて、まずは最近の現場に行くよ。ある程度は捜査も進んでゐるだろうから」

「分かりました」

彼もそのことを不審がることはなく、目撃者の家へと歩いて行つた。

さつきは他人事のように言つたが、実は私も能力者である。使えるのは精神感応、俗に言うテレパシーだ。人に質問するときとかに結構便利なんだけど、ばれない様に使おうとするとなかなか難しい。基本的にどんな人でも読もうと思えば読めるから、受信を切つておかないと発言かどうか勘違いしかねないとか、間違えて『読んだ』内容を直接話すと

「え、お前なんで知つてるの」

つてなるから言い方に注意しないとイケないとか。まあ『いつ何時心を読んでゐるか分からない人間』なんて信用できるはずがないから、祖父以外には絶対にばれないよう心掛けてゐる。ただこの能力で、少しでも捜査に役立てたらいいなとは思つてゐるけど……

現場に到着すると、そこにはかつて草木に溢れた庭園があつたであろう焼け跡が目に入る。次いで視線を移せば、これもまた私が一生かけても買えないような大豪邸、だつたであろう建築物の成れの果て。放火の被害がよく分かる惨状だつた。

「それじゃ、僕は鑑識に聞くことがあるから先に行くよ。ついてきてもいいし近くの場所を探してもいいから」

それだけ伝えると、足早に署長は鑑識らしき青服の人物に歩み寄つていく。ぴつたりくつについて行動するのもよくないと思うし、……というか放火があつたつてこと以外何も聞いてない気がするんだけど。とりあえずその場でぐるりと周りを見渡してみる。屋敷から離れた位置にある看板には、

「燃えるゴミは月水金、ビン・カンは火土、ペットボトルは水」

と書かれてゐる。今日は月曜日だから燃えるゴミの日だ。しかし日曜日しか休めないつて、清掃業者の人も中々大変だな……。

次に足元を見てみると、屋敷と門を結ぶ石道がやけに輝いてゐる。手袋を付けて軽く触つてみると、指にはキラキラした透明の粒が少しだけくつついた。色合い的にプラスチックか、もしくはガラスあたり？

「やあ、待たせたね」

「お疲れ様です」

そこまで調べたところで署長が戻つてきた。手袋をしまつて話を聞く。

「さて、というか来るまでの間に話してなかつたのが悪いんだけどね。今更だけど事件の概要を説明するよ」

「お願いします」

あ、やつぱり署長も忘れてたんだ。屋敷の焼け跡を指しながら彼は話し始める。

「事件は全部で三件。一件目は二週間前の土曜未明、被害者は医者 権田幸三、三十二歳。実家の病院が全焼して、両親と彼の三人が死亡。幸い他の家に被害はなかつたけどね」

「権田幸三、三十二歳」

メモを取り出し話をまとめていく。テレパシーを使えばいつでも読めるじゃないかと思われそうだけど、人の思考って結構あやふやだから欲しい情報を得るのも難しいんだよね。というか自分でミスったりカバリーには使いたくない。

「二件目は先週の火曜の未明。被害者は作家の秋林勇樹、三十二歳。アパートに一人暮らして、彼のいた部屋含め三部屋が全焼。彼以外に三人が軽い火傷だったかな」

「秋林勇樹、三十二歳」

「そして三件目、先週土曜日から一昨日だね。やっぱり未明だよ。被害者は官僚の倉井次郎、三十二歳。この家が現場なのは言うまでもないかな。彼の両親と妻に三人の子供と、一家全員が焼死した」

「倉井次郎、三十二歳……あれ？」

「どうかしたのかい」

何か間違いでもあったか、と聞きたそうな声で返事が入る。けどこの三人の経歴って、誰がどう見ても「あれ」だよな。

「同じ年なんですね、被害の中心になった三人とも」

「ああうん、三人とも地元の中学の同期生。ここから出て行かずに近くの高校、大学に進学して今の職になったらしい」

「なら中学時代とかに、何かしら恨みを買う要因があってもおかしくないですよな」

「そうだね、そこは帰ってから調べようか。で、問題なのは……凶器なんだよ。何が使われたと思う？」

凶器か。こんな館を丸々一つ吹き飛ばせるのを見るに、普通に考えれば相当やばい代物なんだろうけど。それならわざわざ質問しないでらうし。

「爆弾、それも一般人が入手や製造が出来るくらい簡単な構造の物ですか」

「正解だよ」

そう言うと彼はポケットから薄い板のようなものを取り出す。形からして、割れたガラス板だろうか。ってガラス板？

「まずガラス瓶、多分ワインあたりかな。そこにガソリンを注ぐ。そしてコルクで栓をして少し放置する。中に揮発ガソリンと空気の混合気体が充満するから、あとは瓶の中で火花を発生させるだけでドカンさ」

「……うわあ」

確かに簡単だ。瓶なんて日常どこにでもあるし、ガソリンだって自分の車から取り出せば違法にさえならない。コルクだって百均に行けばすぐ手に入るし、引火させるのだから……

「署長」

「うん？」

「引火手段は何だったんですか？ 犯人が着火したなら自分が怪我しますし、簡易な装置を使ったならその痕跡が残るでしょう、し……」

言い終わる前に気づいた、署長の顔がどんどん曇っていくことに。これ絶対碌でもない方法だと気づいたのはすぐのことだ。

「ないよ」

「えっ」

「複雑な機械はおろか、導火線やマッチの残骸、もつと言えば紐の燃えカスさえ見つかってない。丸一日以上調べてるのにね」

「……」

「そりや上が丸投げもしたくなるよ。どう足掻いても残骸を残さず引火させる方法が思い浮かばないんだから。しかも事件前後で不審者がいたとかならまだ楽なのに、夜遅いからその証言さえない。八方塞がりだよ全く」

うんざりした様に頭を振る署長。けどこの話って、「物理的に引火させるには火元がいるのに、それが見つからないから説明がつかない」ってだけだよな。署長が見落としては思えないんだけど。

「木下君」

「は、はい」

「君の意見を聞かせてほしい。何、どんな馬鹿げた意見でも笑わな

「いから言ってみたまえ」

「優しい口調とは裏腹に目が笑っていない。間違いない、これ誤った回答したら怒られる流れだ。けど実際思い浮かぶのは一つしかないんだよね……」

「……発火能力者、とか」

「ふむ」

「ずい、と身を乗り出される。怖い怖いこわいって！」

「一つは火種がないという点、これに関しては発火能力者なら容易に解決できます。ガスで満ちた瓶内の空間に、少し炎を灯すだけで大炎上ですから」

「うん」

「そしてもう一つ、事件のあった日付というより曜日ですけど、全部カシ・ピンの収集日なんですよ。そこに看板があることを踏まえても、ゴミ捨ての一般客を装って仕込み瓶を置いていけたって不思議じゃないです」

「……」

「あと本庁の方の事件、大規模な組織が絡んでるならその中で血の気がある構成員が先走って起こした犯行って線も」

「……………」

「いや穴だらけなのは承知の上ですけど、そうと考えるきや説明が難しいですよ……」

「……………」

「ああ、判決を待つ被告人ってこんな気分なんだろうな。痛くないといいけど……」

「……なるほど、君も同じ意見か」

「えっ」

「僕も同意見だよ。最後の構成員説はともかく、他の説は普通にあり得るからね。まあこんな報告書書いたら説教くらいそうだけだね」
「今度は目も含めてゆったりした笑顔。どうやら首の皮一枚つながったようだ。」

「さて、そろそろ時間だし一回署に戻ろう。僕らが不在の間に誰かが来たら大変だからね」

「はい」

「さっき来た道を通って署に戻ることにした。けど四月にしてはもう暑いな……スーツ脱いできて正解だった。」

「途中で買ったコンビニ弁当をつまみながら、署内常備のノートパソコンに向かい合う。三人が同中学校であるという共通点から何か見つからないかと、ただただキーボードを叩く。」

「君は真面目だねえ、昼休みだと若者は殆どゲームしてるからね。別にいいんだけど」

「気になることは早く調べておかないと、というか明日火曜日ですよ。また誰かが死ぬかもしれないんですから早くしないと」

「なるほどねえ」

「そう言いながらネット記事を調べていると、気になるページがヒットした。」

「『市内中学校にて、能力者が自殺』?」

「お、何か見つけたかな」

「これからです。えーっと……」

「記事に素早く、けれどしつかり目を通す。何々……」

「十七年前の九月中旬、市立桐之下中学で当時三年の結崎信二氏が川に身を投げ行方不明となった。曰く被害者は能力者であることを理由に日常的に罵倒や暴行などを受けていたそうだが、誰が関与していたかは明らかになっていない模様。」

「よくある在り来たりないじめの事件だ。心は痛むが、何か情報になりそうな文面があるとは——」

「なお被害者の遺書には、よく『大火事野郎』、『自分で燃えて死ぬ』などの暴言を受けていたと書いてあり……」

「——署長、この辺りに暮らしていた結崎信二って生徒のことわか

りますか!？」

「ん、どうしたんだいそんなに慌てて」

「とりあえずこの記事読んで下さい!」

弁当の残りをかきこみつつ、署長に記事を見せる。

「……なるほどね、ちよつと待つて下さい」

言いたいことは伝わったらしく、すぐ固定電話を手に取り何処かに電話を掛け始めた。

「桐之下交番の神山だ。そちらが渡してきた放火事件で気になる点がある、十七年前投身自殺で行方不明になった結崎信二に関する資料を用意しろ」

そこから二言三言だけ言うと、速やかに通話を切る。その表情は柔らかな雰囲気似合わぬ厳しい目つきに彩られていた。

「これで明日には、結崎に関する資料が手に入る。さて、次に行く場所は決まったかい?」

「……あー、あるにはあるんですが心当たりになってないんですよ」

「妙な言い方だね、という?」

さっきの話を聞くに、投身自殺云々が放火事件に絡んでいるのは間違いない。けど例の中学に在籍していた人間が何人も残っていると

は思えないし、居たとしてもその人を探すだけで一日くらい終わってしまう。だからどう言ったものか……と考えていると。

「おつと、電話だね。番号を見るに、一般市民からの通報のようだね。電話を取り、先ほどとは裏腹に穏やかな対応を見せる。まあ焦つて相手を不安がらせても本末転倒だし、当たり前か。」

「はい、はい……わかりました。今から向かいます。ええ、ご安心ください。それでは」

電話を下ろし、こちらに向き直る署長。

「ある一家に、放火事件の犯人から犯行予告が届いたらしい。君もさっき言っていた通り今日犯行が行われる可能性は高いし、話を聞くのも兼ねてこれから向かうよ」

「ある程度は僕がフォローするから、気になることがあれば常識的な範囲で聞いてみるといい。何を答えさせられても死ぬよりはよほど良いからね」

「はい……」

この前置き、きつと署長は私が結崎に関わる質問をすると分かった上での念押しだろう。あれだけ反応すれば予想つくよね。流石に私がそこから「読む」つもりで事までは気付いていないだろうけど、この人の前で迂闊な事は出来ない、心底そう思うよ。服の皺を直し、私たちは通報された家へと向かった。

出迎えてくれたのは夫婦らしき一組の男女だった。服装にも特におかしなところはなく、平々凡々な一般家庭の住人と言ったところだろうか。

「本日はお忙しい中、申し訳ありません」

「いえいえ、これも私どもの職務ですから」

男性と署長が挨拶を交わしながら、私たちは居間に通される。女性が四つのティーカップを持つてくると、小さな子供が私にぶつかってきたのはほとんど同時だった。

「えへへ、ぎゅーっ!」

「こ、こら末夏! お客さんに対して失礼でしょ!」

「あはは、私なら大丈夫ですよ……」

不意を打たれたのにはびっくりしたけど、これでも力には自信がある方だ。幼稚園児、それも女の子を一人担ぎ上げることくらい容易い。

「如何にも女の子らしい一面ですねえ、二人とも」

「ええ、しかしあの子が初対面の人に懐くなんて滅多にないんですよ」

「何か惹かれる点でもあったのかもかもしれませんね」

男二人が年寄りのような会話を挟み、お茶を口に含んだところで思い出したように話を切り出した。

「失礼、申し遅れました。私は桐之下交番の神山と申します。それで彼女が」

「あ、木下と申します。よろしくお願ひします」

「どうもご丁寧に。僕は平井雄介、彼女は妻の綾音です」

「平井綾音です、本日はわざわざありがとうございます」

「みなだよ、よろしくね！」

「よろしく」

五人が自己紹介を終えたところで一息つくと、やつぱり署長が口を開く。とりあえず、その様子を見ていることにする。擦り寄ってくる未夏ちゃんを高い高いしながら。

「予告状についての前に、お二人の年齢を教えてくださいますか？」

「僕も綾音も三十二歳ですよ、職場結婚したもので」

「確かに仲のよろしいことで。結婚は何年前に？」

「六年前です、私から雄介さんにプロポーズしたんですよ」

「ほうほう、それはそれは」

そこからもしばらく世間話が続く。多分、相手の緊張を解して話しやすくするのが目的なんだろう。リラククスしてきたみたいだし、ちよつと「読んで」みようか。何か分かるかもしれないしね。

「おねーちゃん」

『おねーちゃんのおむね、おかーさんよりちつちやい』

未夏ちゃん、それは余計なお世話って言うんだよ。確かにべたん

こだけど。子供相手に言っても仕方ないから言わないけど。

「神山さんはお口が上手ですねえ」

『優しそーだし話しやすーいんだけど、何時になつたら本題に入つてくれるのかしら』

署長、綾音さん雑談に飽き始めてます。早くしてあげた方がいいんじゃないでしょうか。

「警察の人って堅苦しい人ばかりかと思つてましたが、貴方みたいな人もいるんですね」

『こんな手練れつぽい爺さんが来るとは、予告状を出したのは失敗

だったか』

……え？ 雄介さん、今なんて言った？

脳裏に疑問が浮かぶが、それに答えてくれる人は当然いない。けど一回だけなら、聞き間違いもありえる。そう考え、神経をより研ぎ澄ませていく。

「さて、そろそろ本題に入りましょう。まず犯行予告を見せて頂いても？」

「はい、どうぞ」

『やつと始まった』

綾音さんが差し出してきたのは、赤色のメッセージカード。そこに黒のワープロ文字で、

「最近話題の放火魔だ。次はお前の家、期日は未定。精々怯えておけ、そして恐怖に塗れて焼け死ぬんだな」

とだけ。手書きじゃないあたり筆跡鑑定を恐れたのか、それとも知り合いになら分かる文字だったのか。

「ありがとうございます。失礼ですが、お二人に犯行予告を受ける心あたりなどは？」

「ありません、分からないのが怖くて」

『いったい誰がこんなタチ悪いイタズラをしてるの……』

「二人で話し合つたんですが、到底心当たりになるようなトラブルなんて無い筈なんです」

『心当たりがない、か。あれだけやつておいてよくもまあ言えたな』
二回目となると間違いようがない、予告状を出したのは雄介さんで決まりだ。通報現場にいきなり犯人がいるのは驚いたが、けど何故予告状を出したりした？

「心当たりはない、と。では次にですが、お二人の出身中学を教えてくださいますか」

「出身中学ですか。桐之下中学ですが、それがどうされましたか？」

『まさかあの事件が関係してる……？』

「僕は松谷中学って所に通つてました。岩手の方です」

『誰も俺が桐之下に通ってたなんて知らないだろうな』

表情と発言だけ見れば何もおかしくはないのに、『聞けば聞くほど』怪しく見える雄介氏。もうここまで来たら確定なんじゃないか、と思うけど公言する訳にはいかないのがもどかしい。そんな私の苦悩をよそに署長は話を進めていく。

「出来れば内密に願いたいのですが。今までの被害者が三件とも、あの中学と関わりのある人物で。もしかしたらと考えたのです」

「え……もしかしてあの予告状、私に向けられたものってことですか……？」

『やっぱり結崎の恨み？ アイツ確か炎使いだっだし、それで私たちに復讐してるの……？』

「綾音、そんなはずないじゃないか。何で君が恨まれる必要があるんだ」

『やつと分かったか馬鹿アマ。こういう所は昔より鈍くなってんな』
ダメだ、発言と思考のギャップで頭がこんがらがってくる。だからここで「聞く」のを止めたら重要な話を聞き逃しそうだし。

「先ほどの話は忘れて頂けると幸いです。……さて木下君、君も何か聞いておくことはあるかな？」

「え、私ですか？」
「おねーちゃんだよ」

確かに署を出る前に質問するとは言ったけど、流石に急すぎじゃないかな……えーっと、どうしよう。室内に目をやりながら考えて、ふとある場所が目に入る。結構たぐさんのワインらしき瓶が保存されている棚。そういえば事件の凶器も瓶だったよね。

「えっと、ゴミ収集の日ってどこにゴミを置いてますか？」

「僕は知りませんね。綾音、どこだい？」

『いきなりどうしたんだこの女刑事。人の家のゴミ事情がそんなに気になるのか』

「基本的に門の前、壁に沿うように置いてます。道路に沿うようにした方が業者の方も楽ですし」

『けど何故そんなことを聞くんだろう、事件に関係があるのかな』
「ありがとうございます。それと、結崎信二さんってご存知ですか？」

そう聞いた瞬間、空気がびしりと凍りついたのが心を読まずともはつきりわかった。署長の目は下がり、綾音さんの顔は強張り、雄介氏の手が力が籠る。私も当然緊張するし、状況が分かっているのは未夏ちゃんだけだ。

「……僕は知りません」

『なんでそこで俺の名前が出てくるんだよ……！』

「……昔の同級生です、若くして亡くなってしまいました」

『私は悪くない、悪いのは結崎自身……！』

「……？」

『おとーさんとおかーさん、どうしたんだろう』

「……軽率な質問、申し訳ありませんでした」

まさかここまでピンポイントとは思わなかった。正直犯人を逆上させてしまいかねないとも思い、先に謝罪する。その対応が予想外だったのか、二人とも面食らったような表情を浮かべていた。

「い、いえ。これもお仕事でしょうし」

「むしろ何も知らなくて力になれず、すみません」

「おしごとたいへんだねー」

三者三様の返答。誰が悪いってわけでもないけど正直いたたまれない。けどそんな沈黙は、やっぱり署長によって破られた。

「さて、それでは我々はこちらでお暇します。こちらの方で警戒を強化しておきますので、安心してお過ごしください。それでは」
背中を向けて歩き去っていく署長。慌ててその後を追う。

「あ、お茶御馳走様でした！ 美味しかったです！ それでは！」
私が彼に追いついたのは、玄関ギリギリの所だった。

「さて、参考人の話を聞いたところで君の意見をもう一回聞こうか」
相も変わらず二人しかいない交番、通路を隔てて向かい合う私た

ち。

さっきの『話』を聞いて、私の中では犯人が誰か九割九分決まっている。けどそれを言うことは出来ない、だから至ってありきたりな解答をする。

「綾音さんの話から、瓶のすり替えは容易に出来ると考えられます。そして過去三回の事件、いずれも未明に起こっていますよね」

「そうだね」

「なので、未明少し前から平井宅に張り込んでおき、犯人を確保するのが最も適切かと」

「そこまで聞き終えると、署長は天井を見上げて一息つく。私の話を整理して色々考えているのだろう。」

「……で、もちろんそれだけじゃないよね」

「はい」

「やっぱり分かってたか、この話に続きがあるって。まあここまでで終わってたら本庁の轍を踏むの分かりきってるし。」

「張り込みを始めて少し経過した後、誰も通りかからなければ凶器の瓶をすり替えます」

「ふむ、それなら大分安全だろうけど証拠が無くなるよ?」

「なので、その中の一つにサラダ油を染み込ませたティッシュあたりを入れておきます。これならガソリンを爆発させるより遥かに安全ですし、証拠も取りやすい。ちよっと台所を漁れば簡単に見つけられますから」

「ふむふむ」

「恐らくですが、犯人は手袋を付けているので回収した瓶に指紋があっても全く意味がないんですよ。だったら物的証拠より、実際能力を使ってる所を抑えたほうが確実です」

「……」

もう一度考え込む署長。事実、私がやろうとしてることって割とグレーなんだよね。法にこそ触れないけどマスコミに見られたらバッシング間違いない感じの。だから彼が悩むのも無理はない、という

か着任初日の平巡査が何言ってるんだと一笑に付すのが普通の対応なんだろうけど。

「……乗ったよ」

「えっ」

「死人が出ず犯人を特定できるなら、それに越したことは無い。責任は押し付けるし、最悪僕一人が被ってもどうにかなるレベルだしね」

いや、二割ほど冗談だったのにまさか採用されるとは思わなかった。確かに大分さつき「笑わないから何でも言ってみろ」とは言っていたけどさ！

……まあ、決まったものはないか。

「幸い空き瓶は僕の家沢山あるからね。持ってくるから使うといよいよ」

「ありがとうございます」

そうとなれば仕込みだ。こんな事件をさつきと終わらせるために、しっかりと準備しないと……

男が路地を進む。闇夜に溶け込むような黒いコートを着込み、ただただ歩き続ける。

ある家の前でその足を止める。足元に目をやれば、そこには整然と並んだ空き瓶が十本ほど。いずれにもコルクが挿さっていること以外に、特に違和は見られない。

その様を見届け、彼は再び歩き始める。一步、二歩、三歩。十歩ほど進んだところで足を止め、何も付けていない右手を顔の前に掲げる。一瞬空を見上げ、指を鳴らす音が夜道に響き――

――何も、起こらない。

男は慌てて振り返り、先の家まで戻る。そして再び指を鳴らす。

一回、二回、三回……反応はない。しかし男は続ける。そして七回目、ポンツという間抜けな音と共に瓶が明るく輝いた刹那。彼は突

然現れた光に照らされることとなる。そして、
「連続放火魔くん、君はもう包囲されている。大人しく出頭する
いい」

放火魔が仕込み瓶に火を付けた瞬間、急いで持っていた懐中電灯
を向ける。一瞬犯人が立ち眩んだのを見て、すぐさま署長が相手に
告げる。

「連続放火魔くん、君はもう包囲されている。大人しく出頭すると
いい」

包囲しているなんて大嘘だが、流石にこつちが二人なんてばれた
ら逆上して襲われかねない。落ち着くまではこちらの方が優位に立っ
ておかないといざって時に面倒だから。

犯人はフードを被っていたが、真正面から照らせば流石に顔もわ
かる。それもちい数時間前に出会った人間の顔、そうそう忘れるは
ずがない。

「平井雄介さん、ですね。現住建造物等放火罪未遂の容疑で現行犯
逮捕します」

私を手錠を取り出しても動じなかった犯人——雄介氏だが、署長
が手招きして呼んだ人物には驚きを隠せなかったようで目が見開い
ていた。

「雄介さん、なんでこんなことを……」

「おとーさん……」

それは綾音さんにとつても同様だろう。まさか犯行予告を差し出
してきたのが愛する自分の夫だったなんて、予想出来るはずもない。
というか普通じや気付けない、私みたいなイレギュラーがむしろ例
外的過ぎたのだ。

「何故か。よくもまあ……よくもまあ言えたもんだな黒山綾音っ！
「雄介さん……？」

きつと綾音さんは知らなかった筈、そして彼も、事件を起こす少

し前まではきつと知らなかった筈なのだ。まさか結婚した相手が、
「かつて人を一人殺しておいて、自分だけはのうのうと生き続ける
なんてなあ！」

いじめで人を死に追いやった人間と、死に追いやられた人間とい
う間柄だったなんて。

「え、え……」

「その女刑事が言ってただろ、結崎信二つて男のことを。もちろ
ん覚えてるよな、お前らが暴言と暴行の果てに自殺まで追い込んだ
人間のことさ！」

「け、けど結崎と雄介さんに何の関係が……」

「まだ分からないのかこの馬鹿女は。だから、俺なんだよ」

「お、俺つて」

「俺が、お前らが殺した中学生、結崎信二だつて言つてんだよ！」
「……！」

今度は綾音さんが絶句する。未夏ちゃんはもう話に着いていけ
ないようだ。

「権田、秋林、倉井のことはお前もよく知つてるだろ。俺が殺した
奴ら共だよ、そして俺を死に追いやった奴らさ、お前も一緒にな！」
「あ……」

「これは復讐さ、俺を殺したお前等に対する、な！」

そこまで言うと、呆然と立ち尽くす綾音さんに襲い掛からんと駆
け出す容疑者、雄介氏。右手を構えるのを見るに、直接燃やそうと
いうことか。

「綾音さんっ！」

右手に手錠を掛けつつ叫ぶが、シヨックが大きいのか微動だにし
ない。このままじや振り解かれるのが落ちだし、そうなつたらお終
いだ。だつたら！

「ッ!？」

何かに引つ張られたかのようにつんのめつた容疑者。何事かと彼
が振り向いた視線の先には、自分の手に掛けられた手錠、それを結

ぶ鎖、そして「私が自分の手に掛けた」手錠の片割れがあった。状況に気付いたのだろう、彼の顔がみるみる赤く染まる。

「取り押さえるから二人を避難させておいて！」

そう伝えるや否や、私を倒そうと容疑者が飛びかかってくる。けど手錠で動きにくいのはどっちも同じ、それなら素人に負けるはずがない。手首を上手く回し、大振りな攻撃を的確に躲していく。

けどこのままじゃ防戦一方、落とすにしても一撃で沈めないで。

そう考えていた私の手首に、突如焼けつくような痛みが走った。

「熱っ……！」

手錠を掛けた右手を見る。その鉄輪は輝くような銀白色から、危険を思わせる赤色に変わっていた。どうか少し考えれば分かるだろう、何故発火能力者に金属製品で挑んだ！ しかし後悔している暇など無く。

「さっさと、死んで、アイツを殺せろよ！」

「っ！」

逆上して疲れを感じてない相手とは裏腹に、手首が焦げる熱さにも意識を持ってかれて回避も疎かになる。もう形振り構ってられない、次で落とす。

「ああああ！」

これで落とすつもりなのか、これまでで一番の振りでストレートを繰り出してくる。それを最小限の動きで躲し、右手を思い切り手前に引く！

「ぐっ！」

鉄板に手を押し付けるような半自殺行為、しかし成果はあったよ。容疑者は体を支えきれず倒れ込む。申し訳ないと思いつつも、その頭めがけて回し蹴りを――

「もうやめてええ！」

――空から「落ちてきた」巨大な水の塊に打たれ、せめてもの一撃を当てることは敵わなかった。

「痛いっ!？」

鉄砲水なんてレベルじゃない水圧に真上から打たれ、数メートルほど地面を転がる羽目になる。二回転三回転と地面を転がったところで、右手に違和感を抱く。火傷こそ治ってるはずがないんだけど、やけに軽いような。

「あつ」

手に目をやると、僅かな鎖を残して無残にも切れてしまった手錠の成れの果てが。ひよつとして急熱からの急冷で鎖が駄目になった？ ……つて冷静に考えてる場合じゃない！

「しょ、署長！ くしゅん、早く容疑者を……！」

「いや、その必要はないよ」

確保してくれ、と言おうとするも即座に遮られる。疑問に思い相手の方を見ると、そこには容疑者の父に泣きつく未夏ちゃんの姿があった。

「おとーさん、もうやめて！ おとーさんとおかーさんがげんかするのなんて、見たくないよお……！」

「未夏……！」

そこに綾音さんも向かい、無言で立ち尽くす大人二人と泣きつづける子供一人。また容疑者が襲い掛かるんじゃないかと不安に思ってたけどそんな素振りは全くなくて。十分くらい経ったくらいで、泣き疲れたのか未夏ちゃんが眠りに落ちる。二人ともすっかり憔悴しており、もう何かが起こることもなさそうだ。

「では平井綾音さん、及び平井……結崎信二さん。伺いたいことが多々ありますので夜分遅くですが署まで同行願えますか」

「はい」

「分かりました……！」

手錠こそ掛けてないけど、二人を署まで連れて行くこととする署長。慌てて着いて行くこととしたが、その行動も手で静止される。

「木下君、君はもう上がるといい。ご苦労だったね」

「はい、つくしゅん」

最後までいたほうがいいのかとは思ったが、どうせこの状態じゃ手伝いも何も出来ないだろうしお言葉に甘えることにする。

「お疲れ様でした……」

「しつかり休むようにね」

その後、ふらふらとした足取りで家に着いて倒れ込むまでに、もの数分もかからなかった。

「二人とも逮捕ですか」

「そうだよ、に投げたらそういう判断が返ってきた」

翌日の昼、相変わらず二人きりの交番で署長からあの後の一幕について話を聞いていた。

平井雄介もとい結崎信二氏は現住建造物等放火罪が三件と未遂が一件で逮捕された。曰く自供したらしい。もう復讐する意味もないと。一応自首という形にはなるらしいけど、子供やお年寄りを含めて十人近い死者を出していることから良くて無期懲役、というかほぼ確実に極刑が下るだろうとのこと。

妻の綾音さんは被害者三人とともに十七年前の事件で起訴されるとのこと。死亡届が出たのが十年前で殺人の時効が十五年だからだそうだが、実際の所は本人の希望が大きいらしいけど。

そして娘の未夏ちゃん、警察の中でも超能力犯罪を捜査する部署に引き取られたらしい。軽く記憶操作をして、能力者たちが過ごす施設に住ませるとのこと。健やかに育ってくればいいんだけど……

「しかし君も災難だったね、『無能力者』には能力者の犯罪は中々大変だろう」

「……ええ、そうですね」

ここで自分も能力者だ、って言ったらどんな反応をされるのだろうか。興味は尽きないけど、たった一度のリアクションの為にこの先数十年の職を捨てるだけの度胸は持っていない。

「そうそう、手首の調子はどうだい？」

私の右手首に巻かれた包帯を見ながら尋ねる署長。昨日の攻防で手錠に焼かれた部分だ。

「多少痕は残るかもしれないけど、日常生活に支障はないって言われました」

ただし数日は安静に——と伝えようとしたところ、署長が一枚の紙を差し出してきた。

「これは？」

何の紙だろうと思ひ、上の方に目をやると……。

「始末書だよ、明日までに書いてね」

「えっ」

「それと向こうからの伝言だけだね、『勇敢なのは大いに結構だが、備品は無料でないことを忘れないように』だつてさ。まあ弁償はしなくていいから安心しなよ」

「そんな……」

「という訳で、僕は見回りに行つて来るから留守をよろしく頼むよ」
それだけ言い残すと、署長はさつさと出て行つてしまった。残されたのは私一人だけ。

始末書の中身を考えながら、ぼんやりと天井を見上げる。未夏ちゃんには上手く生きていけるのだろうか、色々思うことはあつたけどそれが一番大きかった。……違うか。

そういう人を増やさないために私たち警察がいるんだから、悩むより行動しないといけないよね、頑張らないと！

そう決心し、一先ず始末書を書き始めた。

——都内全域を巻き込んだ「あの大事件」の捜査に私が召集されるまで、あと数か月。

続く……？

下

上

ス

下

作

品

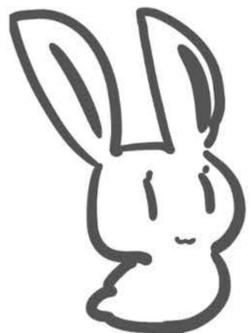




illustration: cloude

こんにちは!
猫にやんです
突然ですが、
こういう所に文章を書く
イラスト班の人って
少ないんですよ
皆さん謙虚だなあ
と思っております
私はどんどん
書いていきますよ?
自己主張人間なので。
自己主張と言うと
良くないイメージを
持つ方が多いですが
自己主張はある意味
創作の源じゃないかな
と私なんかは思います
なので私は文章でも
自己主張していきます
じゃあ小説書けよってね
本当その通りです。

以上、
小説がメチャに
間に合わなかった猫でした



©inaba31415





ぶっちー

anon_deliverzゲーム作成コラム

フランカー

今回は一年生の時のノベルゲーム作成について色々書きたいと思います。前提として複数人でゲームを作成しているということを書きますがよろしく願います。べ、べつに小説が書けなくてコラムに逃げたなんてそんなことはないだからね！

ノベルゲーム作成に至ったきっかけは先輩方が企画してくださいました「一年生無茶振り企画」という企画です。内容はというと、なんでもいいからまず自分でなにか作ってみよう！ というものでした。ノベルゲームは私とスギノキさん（ハンドルネームです）の二人で作成しました。タイトルは「彼女は星を食む」です、公開はまだですが部室のPCにぶち込んであるのでよければプレイしてください。

では「初めてのゲーム作成で大事なことを書いていきたいと思っています。

まずは「納期の設定」が大事だと思います、このルート分岐はいつまで、このエンディングはいつまでに作る、といったように作業を細分化して設定するという事です。ここで大事なのは納期の「厳守」ではなく納期の「設定」です。というのも初めてのゲーム作成で素人が決めた納期なんて守れるわけありません（僕は守れませんでした）。この作業にどのくらいかかるのか、それをかなりの精度で想定できれば正しい納期も設定できると思いますが、初めてのゲーム作成ではそれは中々難しいと思います。私達の場合は私が勝手に納期（自分の分も含めて）を設定していました。あくまで目標として納期を設定しましょう、強迫観念に基づいてゲーム作成しても楽しく無いでしね。

次に「お互いに作品への認識を共通化する」ということです。私たちはスギノキさんがゲームの構想を練り、それを私が文章化し、スギノキさんに見てもらい校正してもらおうという形をとっていました。面倒に見えますが、文章以外の諸々はスギノキさんに任せてしまっていたのでせめて文章だけでも書こうということでこういう風にしていました。ここでお互い頭の中で描いているものが違うと折角のアイデアがダメになってしまったり、軌道修正で余計な手間がかかったりしてしまいます。しかしただ構想に忠実に文章を書けばいいというものではなく、作品をよりよくするためのアイデアは歓迎されるべきです、一番気を付けないといけないのは共同制作者（この場合はスギノキさん）を尊重し、相手のアイデアを大幅にアレンジするときは相手に伝えるべきです。全員作品をより良いものにしたという気持ちは同じはずですが、少しの行き違いで争いが起こるのは避けるようにしましょう。

次は「本当にこのゲームにこれだけの人数が必要なのか」ということです。基本的にゲーム制作にかかわる人が増えれば増えるほどトラブルは増えます。これは各人の能力うんぬん以前の問題であり、どうしても起こってしまうものです。だからと言って少なすぎても首が回らなくなります。二、三人いれば初めて作るゲームには十分だと思います（大作でもない限り）。あなたと一緒にやりたいという人がたくさんいたとしてもいいゲームを作りたいのならその中から必要なだけのメンバーを選び出す必要があります。

最後に「いつか決断をしないとイケない」ことがあります。納期通りにいかない、できない。そのようなことがあった場合にはゲーム制作を中断、中止しなければならぬことがあります。ゲーム制作とは数ある創作活動の一つであり、それに固執しすぎるがあまり全ての創作活動を棒に振ることはあまりにもつたいたいためです。また、メンバーが極限まで伸ばした締め切りを守らないときはその

メンバーに仕事を渡してもらうことも必要でしょう。あなたがもしゲーム制作のリーダーならばあなたは大ナタを振り、ゲームを完成に導かなければなりません。

私が感じたことは以上です、ネガティブなことも書きましたがゲーム制作はとても楽しいものでした。このコラムを読んでくださった皆様はげんしけんに入部し、ゲームを作ってみようと思ってくださいれば嬉しいことです。